

## - 活性の火 開催への想い -

活性の火実行委員会、代表の杉村 原生（スギムラ ゲンキ）と申します。

私は、JR苫小牧駅前エリアを会場とし、中心市街地活性化を目的とした入場無料の音楽フェスティバル「活性の火」を、2014年より開催しています。時間が経つのは本当に早いもので、当フェスは今回で11回目の開催を数えます。

苫小牧には「とまこまい港まつり」や「樽前神社祭り」など、地元民にはお馴染みである夏の行事がありますが、この「活性の火」も今では一定の認知度を得て、苫小牧の夏を締めくくる恒例行事として広くご認識いただいております。そして地元の方々からは多くの応援と評価をいただき、現在では地元企業や団体等160件以上のご協賛をいただいております。活性の火は既に我々だけのものではなく、苫小牧に欠かせない行事になっている、と受け止めております。

皆様よりいただいた機会に最大限の感謝を込めて、今回も成功を収めながらも今後の開催継続につなげていけるよう準備を進めております。

### ■活性の火を続ける理由

私は苫小牧駅前通り沿いにあるライブハウス「ELLCUBE」の運営を始め、他の音楽関連事業を展開する株式会社LIVE LIFEを経営しています。

私自身は約40年前、両親の都合により苫小牧へ転居し、現在に至るまで長年この苫小牧で生活してきました。1990年代初頭、10代だった私はロックバンドの世界観に憧れを抱いたことから、自分だけの独立した完成や価値観を持つに至ったと思っています。

多感だった自分が過ごした苫小牧の当時の「まち」。今と比べればとても賑やかで、多くの人々が必要とするだけの「存在意義」があったように思えます。中心市街地にはCDショップ、楽器屋、洋服店、飲食店、デパートも複数立ち並んでいました。探検好きな自分は「まち」をくまなく探求し、今でも溢れるほどの思い出が残っています。

自社が位置する現在の店舗に移ってきたのが2009年。20年も経たないうちに、「まち」の姿は一変していました。せっかく駅前にお店を構えることができたのに… あの頃の「まち」は、いったいどこに行ってしまったのか…言葉には言い表せない、寂しい気持ちになりました。

時代は移り変わりを見せ、苫小牧のような地方都市の中心市街地が、地域においての「存在意義」を果たしてどのように確立するのか？その答えは年々難しくなっていると感じています。

しかしながら自分は当時の「まち」の住人として、またあの頃の光景を眺めてみたい願望を抱えながら、自分なりの地域活性化活動を継続しています。諦めずに活性の火を続けてゆくことで、自分達の地域を誇りに思う大切さを伝えられたら…と思っています。